

114 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座

第八期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(6)

講題：日本近世思想史的推展與東亞

辻本雅史

(2025. 10. 23)

摘要

本次演講的主題是「日本近世思想史的發展與東亞」。本週講師為京都大學榮譽教授/中部大學顧問的辻本雅史教授。辻本教授以儒學為中心，回顧了日本近世思想史的脈絡，並闡述了其如何構成東亞文化的一部分。

在進入正題之前，辻本教授首先展示了歐亞大陸的地圖，指出日本位於容易受到東亞各方面影響的地理位置。特別是，他透過展示日本與歷代中國王朝的相互關係圖，從繩文時代開始追溯，說明日本的政治、社會與文化無法脫離與中國的關係而獨立存在。

然而，在明朝滅亡之後，新的國際秩序逐漸形成。在日本，織田信長展開了全國統一的行動，豐臣秀吉則出兵侵略明朝與朝鮮。在文化方面，能樂、茶道、花道等日本獨特的文化形式也相繼誕生。

隨著明朝更替為清朝，日本也開始實施鎖國政策。江戶幕府的鎖國體制，實際上並非完全與外界隔絕，而是透過長崎、對馬、薩摩、松前四個窗口與外部保持有限的交流。根據辻本教授的說法，鎖國是幕府為了管控貿易、排除基督教而建立的「日本式華夷秩序體制」。

儒學；明清學術與文化的受容

即使在鎖國體制之下，日本仍然接受了明清的學術與文化。這一時期的知識與學問的根本是儒學（過去則是佛教）。儒學是一種閱讀東亞共同的經典文本亦即四書五經的學問。然而，在日本並非直接以中文閱讀，而是透過符合日語語法的「訓讀」方式來理解。

在日本，所採取的方法是「素讀」。素讀並非理解其意義，而是反覆朗讀並以背誦為目的的閱讀方式。辻本教授將此定義為「文本的身體化」。也就是說，透過背誦使文本（聖人的言語）融入身體，這些被身體化的言語便成為自己的語言，並能自由運用以進行自我表達。

17・18世紀日本儒學

日本儒學透過舶來的漢籍，與中國及朝鮮一同屬於東亞朱子學思想圈。然而，自17世紀後半期開始，隨著和刻本的出版，日本儒學逐漸本土化。17至18世紀著名的日本儒學者包括中江藤樹、貝原益軒、伊藤仁齋、山崎闡齋、荻生徂徠等人。其中，仁齋批判朱子學的理論體系，並從自身的觀點解讀《論語》，確立了古義學（脫離中國儒學）。闡齋則正確地解讀朱子的思想，並試圖在日本重構其理論體系。徂徠則從反朱子的立場重新詮釋朱子學。他也排斥訓讀法，主張應直接以中文學習中國古典，並提倡以眼睛閱讀、熟習的「看書」方式，而非素讀。徂徠

的儒學透過弟子太宰春台，對朝鮮儒學也產生了影響。

國學

18世紀時，對儒學知識的批判開始出現。例如，本居宣長的國學與平田篤胤的神道理論。宣長為了對抗儒學，提出了「物之哀（もののあわれ）」的概念。這是一種人類心靈與情感的表現，是彼此共鳴的心靈。在中國文化與漢字傳入之前的日本，就已經存在「物之哀」。他主張要恢復這種精神。篤胤則以宗教的方式詮釋宣長的國學。面對歐美列強與基督教的威脅，他主張以神道作為民眾的宗教，以保護民眾的心靈免受外來壓力的侵害。

後期水戶學、幕末與近代

後期水戶學面對社會秩序的崩壞與歐美列強的壓力（內憂外患），透過對《記紀》神話的儒教式重新詮釋，發展出國體論。這成為尊王攘夷思想的理論支柱。幕末與近代時期，日本透過儒學語言（及其翻譯）吸收了西方的知識與學問。中國則是從這些日本的翻譯語中學習西方的知識與學問。

辻本教授總結指出，透過漢文所形成的東亞共同體曾經存在。

關鍵詞：日本儒學、書籍、素讀訓讀、國學、後期水戶學

塚本善也 整理

中文翻譯 CHATGPT/陳順益修改

2025.10.23

114 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座

第八期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(6)

講題：日本近世思想史の展開と東アジア

辻本雅史

(2025. 10. 23)

要旨

本講演のテーマは「日本近世思想史の展開と東アジア」である。辻本講師の辻本雅史教授は、儒学を中心とした日本近世思想史をたどりながら、それが東アジア文化の一翼も構成した様態について語ってくれた。

まず本論の前に、辻本講師はユーラシア大陸の地図を見せ、日本が東アジアからさまざまな影響を受ける地理的位置にあることを示された。とりわけ歴代中国王朝との関係なしに日本の政治、社会、文化が成立しなかったことを、両国の相関関係図を示しながら、縄文時代からたどった。

しかし、明朝の崩壊後、新たな国際秩序が形成されていった。日本では信長による全国統一、秀吉の明・朝鮮への出兵が起きた。文化面でも能楽・茶道・華道など日本独自のものが生み出されていった。

明から清への交代と連動して、日本では鎖国体制が敷かれた。江戸幕府の鎖国体制は、実際には長崎・対馬・薩摩・松前の四つの窓口が開かれていたようだ。外部との完全な遮断・閉鎖ではなかった。辻本講師によると、鎖国は幕府の貿易統制、キリスト教の排除による「日本型華夷秩序の体制」だった。

儒学；明・清学術・文化受容

鎖国体制下でも、明・清の学術・文化は受容された。この時代の知識・学問の根本は儒学である（かつては仏教）。儒学とは東アジア共有のテキスト=経書（四書五経）を読む学問である。しかし、日本では直接中国語ではなく、日本語文法に基づく訓読を通して読まれた。

日本では素読が行われた。素読とは意味の理解ではなく、繰り返し声に出して読み、暗唱を目的とした読み方で、辻本講師はこれを「テキストの身体化」と定義する。すなわち、暗唱によりテキスト（聖人の言葉）が身体に入ることで、その身体化された言葉は自分のものとなり、自在に活用した自己表現となるという。

17・18世紀日本儒学

日本儒学は、舶載漢籍を通じて中国や朝鮮と同じ東アジア朱子学思想圏にあった。しかし、17世紀後半ごろから和刻本が出版されると、儒学の日本化が進んだ。17世紀から18世紀の日本儒学者に中江藤樹、貝原益軒、伊藤仁斎、山崎闇斎、荻生徂徠がいる。例えば、仁斎は朱子学の理論体系を批判し、独自の観点から『論語』を読み解き、古義学を確立した（中国儒学からの脱却）。闇斎は朱子を正しく読み、その理論体系を日本において再構成しようとした。徂徠は反朱子の立場から朱子を読み替えていった。また徂徠は訓読法を斥け、中国古典を直接中国語で学ぶべきこと、素読ではなく、目で読み熟習する看書を主張した。徂徠の儒学は弟子の太宰春台を通して朝鮮儒学にも影響を与えた。

国学

18世紀には儒学に対する批判が起きた。例えば、本居宣長の国学や平田篤胤の神道理論である。宣長は儒学に対抗して、「もののあわれ」を唱えた。それは人間の心・感情の現れであり、互いに共感する心である。中国の文化・

漢字が入る以前の日本には「もののあわれ」があったとして、その回復を主張した。篤胤は宣長の国学を宗教的に語った。欧米列強、キリスト教の脅威に直面し、民衆の心をそうした外圧から守るために、民衆のための宗教一神道を唱えた。

後期水戸学、幕末・近代

後期水戸学は社会秩序の崩壊と欧米列強の圧力(内憂外患)に対し、記紀神話の儒教的読み替えによる国体論を展開した。それは尊王攘夷論の理論的支柱となった。幕末・近代に西洋知識・学問は儒学の言葉(の翻訳)を通して吸収された。中国はこうした日本の翻訳語から西洋の知識・学問を学んでいった。

辻本講師は結論として、こうした漢文を通じた東アジア共同体があったと述べる。

キーワード：日本儒学、書籍、素読訓読、国学、後期水戸学

塚本善也 整理

2025.10.23